

話し言葉における省略

尹 盛熙*

Ellipsis in Spoken Language

Sunghee YOUN

要旨：話し言葉の省略は、書き言葉の場合とは異なる。例えば日本語では、抽象的な情報を伝える機能語は話し言葉より書き言葉で省かれやすい。話し言葉では発したそばから情報が消えるため、遡及と確認ができず、抽象的な情報の復元がより困難となる。このような伝達方式の違いは省略の仕方にも影響する。

Abstract :

Spoken and written language have been demonstrated to differ in a number of regards, including in the phenomenon of ellipsis. In Japanese, function words are omitted much more frequently in written language. Ellipsis of function words is a practical strategy in maximizing efficiency for the sender of a message. From the perspective of a message receiver, however, this poses the cognitive burden of inferring missing information from whatever pieces are retained. After the elimination of such function words as case particles or a function verb ‘suru,’ what is left often forms a simple word-like structure which can be difficult for a receiver to unpack. This difficulty can be attributed to the inherent transient nature of spoken language: there is no record of a message as it is transmitted. With this lack of retroactivity, it cannot be referred back to for clarification. A receiver must rely only on memory to balance the tasks of reconstructing abstract relations among the retained pieces and processing the stream of incoming information. Ellipsis of function words in spoken language is, then, a less viable strategy than in written language, as it puts a cognitive burden on message receivers and runs the risk of misunderstanding.

キーワード：話し言葉、書き言葉、省略、情報伝達、情報解釈

1. はじめに

本稿では、日本語の「話し言葉」といわれる類のテキストに現れる省略現象の特徴を、音声か文字かという媒体及び情報伝達という観点から考える。そのことにより、書き言葉と話し言葉において、情報を伝達する際の効率の求め方がどのように異なるかという問題に向けた視座を設けたい。

言語コミュニケーションにおいてメッセージは、音声を媒体とする場合と、文字を媒体とする場合があり、しばしば前者は発話、後者は文という風に区分されることもある。それぞれを受信する側、そして発信する側の呼び方も、「聞き手／読み手」、「話し手／書き手」などと分かれる¹⁾。発話と文という区分は、「話し言葉」と「書き言葉」、または「口語」と「文語」などとも

*関西学院大学国際学部准教授

呼ばれ、両者の間には、従来の研究で指摘されてきたように、単なる伝達媒体の違い以上の様々な要素が関わっている。

「省略 (ellipsis)」とは、あえて言わなくても文脈などから伝わる要素を省くことをいう。なるべく労力の消費を抑えた効率のよいやり方で意図したメッセージを伝えようとする行為は、おそらく言語普遍的に観察されるものであると考えられる。一方で省略現象の現れ方には、言語の種類やテキストの種類によって共通点のみならず、相違点もあると考えられる。例えばテキストの種類によってその目的や機能、受信者への提示のされ方と状況などが異なる点を考慮すれば、当然のことだと言える。特に、何らかの要素が欠落した状態で発信されるメッセージは、その解釈が受信者側に委ねられるため、受信者に対して情報がどのような形で提示されるのかは、省略のあり方に大きく影響するものと考えられる。

従って以下では、日本語の「話し言葉」と「書き言葉」に区分されるテキストにおいて、省略のあり方に影響すると思われる要素は何か、またそれはどのような違いにつながるのか、という点に焦点をおいて話し言葉の省略を考えることにする。まず次節で、省略現象の概要を述べ、話し言葉と書き言葉の特徴、それぞれの位置づけと違いや、関連する議論の中で言及された基準などについて確認する。続く3節で、発話・文では省略という現象がどのように異なるか、またその違いに関わる要素はどのようなものか、などを探るための試論を述べてみたい。

2. 省略と「話し言葉／書き言葉」

2.1. 省略現象の概要

文または発話の形で発信される言語メッセージを受信者側からしてみれば、当該言語の文法規則から想定できる完全な「文」を基準として、何か言語化されていない要素がある場合、省略が起き

たという印象を受けることになる。

メッセージの発信者は、自分及び相手の労力や時間の消費を抑えるため、状況的な制約を満たすため、または言語使用上の利便性を求めるためなど、様々な理由によって、自分の考えの全てを言語化することができない。従って、省略は語・句・文といった言語の各レベルで必然的に起きることになる。頻繁に用いられる単語の代りに略語を使ったり（「日本経済団体連合会」→「経団連」など）、新聞の見出しで「大雨が降って山間部に土砂崩れが発生した」という内容を「大雨で山間部に土砂崩れ発生」という簡潔な形式で示すことなども、その例である（尹 2016 b）。

上記のような現象は、「自明の情報を省くことで冗長度を下げる」²⁾という省略の主な目的を考慮すると、程度の差こそあれ、あらゆるテキストにおいて見られるものと考えられる。紙幅の制限がある新聞記事や学術論文、及び時間の制限がある演説などに限らず、日常的に行われる会話にしても、話が必要以上に冗長になることは避けるはずである。同様の傾向は、話し言葉、書き言葉を問わず見られると考えられるが、異なるいくつかのテキストを観察すると、省略の現れ方は一様ではないことが分かる。

2.2. 話し言葉と書き言葉の違い

これまでに話し言葉と書き言葉の区分に関する議論では、様々な性質が関わっていることが指摘されてきた。例えば石黒（2015）は、書き言葉と話し言葉の特徴づけるとされる「フォーマルさ」という区分に、少なくとも「硬さ／軟らかさ」と「あらたまり／くだけ」という2本の観点が関わっていることを指摘しており³⁾、滝浦（2014）は、「揮発性／保存性」「対者的直接性／対者的間接性」という性質に加え、日本語における話し言葉と書き言葉の問題には「待遇性」の問題が関わるとしている⁴⁾。

1) 本稿では、媒体の区分を特に問題としない時は「受信者」「発信者」という用語を用いる。

2) 久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店。

3) 石黒圭（2015）。「書き言葉・話し言葉と「硬さ／軟らかさ」」『日本語学』34(1), 14-24.

4) 滝浦真人（2014）。「話し言葉と書き言葉の語用論 日本語の場合」『話し言葉と書き言葉の接点』（石黒圭・橋本行洋（編））ひつじ書房。

これは一口に「話し言葉と書き言葉の特徴」といっても、音声と文字という伝達媒体の違いだけでは区分しきれず、様々な要因が関わった結果、今のように性質の異なる両者のテキストが出来上がったということである。なお、今日ではこの区分は離散的なものではなく、程度を表すものになっており、「話し言葉的」「書き言葉的」または「典型的な話し言葉／書き言葉」という言い方も成立する。

従ってあるテキストに対し、話し言葉であるか、書き言葉であるかという明確な線引きをするのが難しいことが多く、中間的な位置づけのものも存在することになる。例えばテレビのニュースはその代表的なものである。ニュースは、予め作成された文字原稿を音声で読み上げるという形であるため、書き言葉か、話し言葉かの区分が曖昧になる。予め書かれたことから、話し言葉の特徴とされる即時性がない点を重視すれば、「書き言葉の性質が強い」と見ることができる⁵⁾。その一方で、メッセージの受信者に当たる視聴者に伝達される最終形態は音声であるため、書き言葉的な性格を持つ音声テキスト、とも言えるわけである。

他にも、外国の映画やドラマなど、文化コンテンツの理解を手助けする翻訳字幕は、画面上に文字で示されるが、かといって翻訳字幕を書き言葉とは言い切れない。例えば映画の場合、翻訳字幕は、音声によって行われる登場人物の会話を再現する形になるためである。

中間的な性質を持つテキストは枚挙に遑がなく、ツイッターのようなオンライン上の短文、SNSにおけるやり取りなども、話し言葉を文字で記しているという点で線引きが難しい。今日のように、社会も言語行動も複雑になっていく状況

では、メッセージの伝達目的や機能も益々多様化するものと考えられるため、話し言葉か、書き言葉かを明確に規定できるテキストの方がむしろ少ないのではないだろうか。

3. 省略のあり方と情報の取り入れ方

3.1. 話し言葉における省略

それでは、発話や文から何かしらの要素を省く省略は、テキストによってどのように異なるのか。前節で言及した翻訳字幕は、時間的・空間的制限が働くことにより、頻繁に省略が行われるテキストであり、以下のような例が見られる。

- (1) A：子どもに大して遣せない 金にならない商売だ
 B：連続殺人も
 A：例外が
 B：説明を

(1) は、テレビドラマのある場面で提示された日本語字幕である⁶⁾。この場面は、連続殺人を犯しているタクシートの運転手 A が探偵 B に対して、自分があるスポンサーからお金をもらって犯罪を犯しているという状況をほのめかすシーンである。しかし、このような背景説明を踏まえても、上記の字幕がどのような内容のやり取りで、何が省略されているのかを推測するのは容易ではないだろう⁷⁾。

(1) で省略されているのはほとんど述語に当たる部分であり、例えば「連続殺人も」は、文脈から読みとれる趣旨は「(連続殺人も) 同じだ」などであるが、後半を意味する述語が用いられていない。続く「例外が」も、「(例外が) ある」などが省かれているものと想定され、「説明を」に至

5) その場合でも、音声で読まれることを想定して書かれることから、話し言葉の性質が含まれることになる。石黒 (2014) は、指示詞の使用状況の違いからニュースを「話し言葉に近い性質をもつ」「聞き言葉」と規定している。

6) BBC ドラマ『シャーロック』シーズン1の1話より。

7) 以下は (1) と同場面の吹替であり、この会話の省略部分の補足として考えられる一例である。

A：私の遺産なんてたかが知れてる タクシー運転手はもうからないし
 B：連続殺人もだ
 A：それは違う
 B：どう違う？

っては、「(説明を) してくれ」という趣旨であることは読みとれるが、単に「する」のみならず、「～してくれ」といった要求を示す活用形も省かれている。(1) のような省略の仕方は字幕に特徴的に見られ、3.3 で説明する「機能語」を主に省くことによるものである。いずれの場合も、日本語の母語話者が想定できる完全な文を成していない形であり、登場人物の表情や口調、場面全体の脈絡などの手掛かりがなければ、文字情報である字幕だけで理解するのは難しい。

注目したいのは、字幕は基本的に登場人物の会話、即ち「話し言葉」を再現する形であるにもかかわらず、実際の日常会話でこのようなしゃべり方をする例は極めて少ないと考えられる点である。

このような違いにおいて重要であると考えられるのは、話し言葉が持つ特徴と、発信と受信のプロセスである。省略では、話し手の負担の軽減が聞き手の負担の増加につながる。発信者は省略により労力を節約できるが、受信者からしてみれば、欠落のある「不完全なもの」を解釈することになるため、認知的な負担が増えることを意味するのである。この点を考慮すると、情報を文字で発信・受信するか、音声で発信・受信するかという媒体の違いが、省略の仕方に何らかの影響を及ぼすのではないかと考えられる。即ち、省略という現象自体は、音声／文字という伝達媒体の違いに関係なく存在すると考えられるものの、現れ方は一様ではなく、音声／文字という違いに起因する何かの要素が、省略の実現に影響していると推測することができる。次節では、その要素として話し言葉がもつとされる「即時性」と「揮発性」という2点について検討したい。

3.2. 伝達媒体と「遡及可能性」について

前節までの認識を踏まえ、省略の実現様相に影響

すると考えられる話し言葉の特徴に焦点を合わせて話を進める。

話し言葉では、行われる発話は基本的に事前に練られるというより、その場で「即時的に」行われるとされている。記録に留めることにより、何回も読み返すことができる書き言葉に比べて、話し言葉は産出と同時に消えていくという性質を持つことが指摘されてきた。このように話し言葉が持つとされる「即時性」と「揮発性」は、音声を用いて時間軸に沿って行われるという点に起因するものである。

言語は基本的に「時間的な現象である」としたチェイフ (1999) は、言語の算出と受容に対する時間の関係が話し言葉の方により直接的に及ぶと指摘している⁸⁾。これには、音声媒体では情報の伝え方が基本的に時間軸に沿って線条的に行われるという点が深く関連している。即ち音声媒体による情報伝達では、取り込める言語単位の一単位分ずつしか提示できない。例えば言語単位が語彙である場合、語は一語ずつしか伝えられないということである。さらに、一度提示されたら再度聞くことができないという点も大きな要素である⁹⁾。

それに比べて文字で記されたテキストでは、情報の提示の仕方は、基本的に一度に開示される形になる¹⁰⁾。これは、文字テキストに関しては、読み手が情報を取り込むペースを自分で調整し、任意の場所に立ち戻って情報の確認を行うという「遡及」が可能であることを意味する。遡及という行為は、解釈に向けて足りない情報を補足する性質のものであると考えられるため、遡及ができないことは、音声テキストにおいて情報を補足する手段が大きく限られてしまうことを意味する。

音声テキストにおいて情報の取り込み方が、文字テキストの場合に比べて制約が多く、遡及ができないという点は、省略現象にも影響するものと

8) チェイフ, ウォーレス (1999). 「時間は言語のかたちにもどのように影響するか」『時間・ことば・認識』(長野泰彦編) ひつじ書房.

9) 無論、相手に再び同じ内容を再現するように求めることも限られた場合においては可能であるが、発話の流れを止める行為であるため、あくまでも例外であると言えよう。

10) ただし、取り込み方は文字の場合でも基本的には線条的になるとされる。目を介して文字情報を読みとる仕組みに関しては Dehaene (2009) を参照。

考えられる。

3.3. 発話と解釈について

省略が行われる際、基本的な戦略として考えられる手段の一つは「構造をシンプルに保つために機能語を省く」というものである。語には、実質的な意味内容を持つ「実質語」と、抽象的な意味を持ち、文法的な役割を果たす「機能語」がある。コミュニケーション上の効率を考慮すると、具体的な指示対象がある実質語より、抽象的な意味だけを持つ機能語の方が相対的に省かれやすいのは、普遍的な傾向であると推測できる。

機能語が省かれると、文または発話は、実質語だけを並列的に並べるといった単純な構造になる。

(2) a. 「何をしているの?」「宿題。」

b. 22年 W 杯開催時期 作業部会で検討へ

(2a) は「何をしているの?」という質問に対して、「宿題」と短答で返すやり取りであり、(2b) は新聞の見出しの一例である¹¹⁾。このような例では、多くの機能語が省かれている。例えば(2b)の下線部には、「22年の W 杯が開催される時期」などのように、「の」「が」という助詞と、「する」という形式動詞及びそれに付随する「～れる」という受動活用形と、3種類の機能語を補足することができる。これらの機能語は、「22年」「W 杯」「開催」「時期」という各成分が、全体の事象の中で互いにどのように関連するのかという抽象的な情報を伝える役割を担っている。機能語を省くことは、言い換えれば、必要最小限の情報だけ提供するという形であり、時間と労力を節約できるという点は確かである。

しかし、音声テキストにおいてこのような戦略が常に有効であるとは限らない。実際、日常会話で(2b)のように考えを凝縮して話すことも、即時に行われる会話では難しいし、かつ聞き手にとっては相当不親切なものになるだろう。あのような話し方をする場面も、限られると考えられ

る。

(2b) のような形式は話し言葉に比べて書き言葉で頻繁に見られるものがあるが、定延(2014)によると、書き言葉で用いられやすいとする構造(名詞化構文など)をチェイフ(1998)は話し言葉の即時性で説明している。即ち、話し言葉では「人間が話す速度と聞く速度は基本的に同じなので、話し言葉は熟考によって凝縮されず、話し手の意識をそのまま映し出す」という。これを日本語における機能語の省略という観点から見れば、助詞を省いてキーワードのみを並べた(2b)のような形式などは、即時性に基つき、話し言葉で用いられにくいものであると言える。

また解釈する側から考えると、機能語の少ない単純な構造では、用いられた各成分がどのように関わっているかを明示する情報が省かれているために、成分同士の関わり方を把握して文が示す事象の全体像をとらえる作業は、聞き手、即ち情報を取り込む側の認知プロセスに任ざされてしまうわけである。

これは、話し手から発信された音声を時間軸に沿って単位一つ分ずつ受け取りながら、解釈の作業を行うことを意味する。そのような状況では、必要な情報だけ並べられることが効率がいいとは限らない。線条的に入ってくる情報の入力を受けながら、提示される複数の成分同士がどのように繋がっているのか、その間にリンクを張るという立体的な作業を、遡及ができない状態で記憶だけを頼りに行うのは、けっこうな認知的負担になるはずである。

だからこそその作業を手助けするために機能語、すなわち成分同士の意味的な関係を把握するためのリンクとして機能するものが、必要となる。機能語が入るほど発話も文も長くなり、構造が複雑になる可能性が高いわけだが、その分、解釈に役立つ情報がより多く提供され、解釈のプロセスを手助けすることになるのである。

解釈における認知的な負担は、遡及ができる文字テキストの場合も例外ではなく、往々にして

11) 下線部のように機能語を排除した単純な構造は、文章というより語に近いということから「臨時一語」とも言われる。詳細は石井(2007)を参照。

「読みにくさ」と受け取られることだろう。字数制限の強い説明文や記事などの文章では機能語の省略が頻繁に行われるが、これらのテキストが往々にして「読みにくい」のは、そのせいである。即ち、機能語を省くことによって情報入力量が量的に少なくなる代わりに、頭の中で成分間の抽象的な関係を推測して全体の事象を捉える作業が読み手側にゆだねられるので、別の負担が生じると考えられるのである。

4. まとめと今後の課題

以上、音声媒体のテキストと文字媒体のテキストにおける機能語省略の違いと、その要因と思われる特徴を確認した。情報の取り込みを線行的に行うことを強いられる音声媒体の場合と、自分で取り込みの順番や見直しなどのコントロールができる文字媒体の場合とでは、不完全な情報を解釈する過程でより制約が大きいのは前者の方である。そのために、抽象的な情報を補足しながら解釈しなければならない機能語の省略は、音声テキストでは効率的な戦略になりえないと考えられる。言い換えれば、文字テキストの方でより認知的な負担がかかる省略の仕方が可能になるということを意味する。

本稿では、省略の実現様相には多くの要因が関わると考えられるものの、省略現象の現れ方がテキストによって異なる点を、音声か文字か、というもっとも原初的な区分に立ち戻り、情報の発信と取り込み方、解釈という観点から考えることを試みた。今後は多種多様なテキストを実際に検証し、データによる裏づけを行う必要があるが、それは今後の課題としたい。

付記

本稿は、科学研究費（基盤研究（B）16H03413（研究代表者：生越直樹））の成果の一部である。

参考文献

- 石井正彦（2007）. 現代日本語の複合語形成論 ひつじ書房.
- 石黒圭・橋本行洋（編）話し言葉と書き言葉の接点 ひつじ書房
- 久野暉（1978）. 談話の文法 大修館書店.
- 砂川有里子（2006）. 「言う」を用いた複合辞-文法化の重層性に注目して- 藤田・山崎編（2006）複合辞研究の現在 和泉書院
- 多々良直弘（2006）. ニュース報道における言語使用- 名詞句表現の談話機能- 桜美林レビュー, 30, 123-135.
- 野口崇子（2002）. 「見出し」の文法- 解読への手引きと諸問題 講座日本語教育, 38, 94-124.
- メイナード, 泉子 K（2004）. 談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究 くろしお出版
- 尹盛熙（2015）. 新聞見出しにおける日韓の省略と縮約- 形式的違いを中心に- 日本學報, 104, 33-50.
- 尹盛熙（2016 a）. 日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現- 韓国語との対照分析 社会言語科学, 18(2), 19-36.
- 尹盛熙（2016 b）省略現象の対照分析に向けて- 現状と今後の課題（研究ノート）国際学研究 5(1), 121-128
- Dehaene, Stanislas（2009）*Reading in the Brain-The New Science of How We Read*, Penguins books.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R.（1976）. *Cohesion in English*. London : Longman.
- Wilson, Peter（2000）. *Mind the Gap : Ellipsis and Stylistic Variation in Spoken and Written English*. Harlow, Essex : Pearson Education.